

## 1998年度上半期活動報告書

1999年1月20日発行

(電子化註)

- 1) 人名は正式名に修正  
M氏 → 宗像さん N氏 → 西井さん O田 → 久田  
S藤 → 佐藤 T谷 → 蔦2)
- 2) 奥秩父東沢釜の沢 → 奥秩父東沢釜ノ沢 に修正
- 3) 表紙の98下半年期 → 98上半期に訂正
- 4) 電子化作業にて挿入した文章は斜線とした。

## はじめに

OB・OGのみなさま、各大学の山岳部のみなさま、遅まきながら明けておめでとうございます。言うまでもなく僕が長期独裁政権と一橋山岳部において維持している宗像です。この一年間、ブータンでの登山、部室再建の具体化、そして個性的な一年生の入部と、僕にとっても、部にとってもなかなか近年にない軌跡をとったのではないかと思います。僕の海外登山の都合により報告書の作成が遅れましたことお詫び申し上げます。また、海外登山においてはOB・OGの皆様をはじめ、他大学の皆様、さらにはもともとなんの関係もなかった人も含めてご援助、ご助言をいただき、誠にありがとうございました。この場を借りてお礼申し上げます。結果から申しますと、頂上直下で岸壁に阻まれ登頂はなりませんでしたが、自分としては非常にいい経験になったと思っています。詳しい報告は次号の新葉樹にて掲載したいと思います。

さて、この新葉樹も早くも4号を数えることができました。少しは後々の人に役に立つ記録集になってくれればと思っていますが、今は続いているだけでもよしと思っています。とはいえ、今年是一年も入り、ようやく一息つけるのではと思っています。まだまだ、頼りがいがあるとは言いがたい彼らですが、どうぞ見守っていただき、困っているときは手助けいただければ彼らも喜ぶと思います。僕もあつかましいとは思いますが出来る限り手伝うつもりです。そう、ようやく僕も独裁者にはめずらしく禅譲できると思っていますので。

## 《 目次 》

(原本頁)

4/29-5/5	ブータン登山隊合同山行	北アルプス・蔚王尾根-西穂高	1~3
5/1-2	新歓山行	北アルプス・徳本峠	4
6/2-6/22	雪上訓練	北アルプス・潤沢	5
6/11-15	文登研山岳遭難技術研修会	立山雑穀谷	6
6/18-6/14	日本山岳会学生部小川山集会	小川山	7

## 1. ブータン登山隊合同山行 《北アルプス硫黄尾根～西穂高岳》

4/29 (晴れ)

6:25 七倉発～7:40 高瀬ダム 7:55～9:25 名無小屋 9:40～11:10 湯俣 11:40～

12:55 硫黄尾根取り付き～12:55 硫黄尾根稜線上 1:10～4:20 前衛峰直下 T S

ブータン登山隊の参加メンバーの中で都合のつくものだけで硫黄尾根に登ることにした。何のことはない、後輩がいないものばかりである。タクシーで七倉へ。荷物の振り分けをして出発。雪は全くなく、しばらく歩くと暑くなってくる。運動靴を持っていない宗像以外の3人は徐々にペースが落ちてくる。高瀬ダムに着くころにはただただ暑く、うんざりしてくる。名無小屋を過ぎても相変わらず雪はなく、遠くに見える槍が、ただただ黒い。湯俣で宗像が間違えて小屋の方に行ってしまう、引き返す。橋を渡るところはかなり荒れていた。また、取り付きまでもかなり荒れていて嫌な所だ。取り付きにはケルンと先に入山したであろう日大の赤布があった。稜線まではプラグツを履いての笹の藪漕ぎ。汗だくになって稜線に出るが藪はしばらく終わりそうにない。樹林帯の中の笹藪をただただ高度を稼ぐ。徐々に暑さで全員がぐったりしてきて、胸につけたビーコンがただただ空しい。水が取れるところまで行けるのだろうか、心配になって来たころ、やっと雪が現れて、テントを張る。全員疲れて元気がない。他には単独のおじさんが一人いた。

4/30 (晴れ)

3:30 起床 5:10 発～6:50 III・IV峰間のコル 7:05～9:00 VI峰 9:15～12:10 硫黄岳～

3:55 南峰手前コル T S

前衛峰群に入ると、ガラガラの岩稜。稜線上には全く雪がない。III峰の下りで30 マプザイレン。雪がないため降り着いたところも安定しない。ロープを出すほどでもないが、荷物は重く、落ちると、はるか下まで落ちてしまうので、緊張する。次のコルで左の斜面が雪面になっていて、いかげん稜線上の藪にうんざりしていたので雪面に降り立つ。降り口が悪く、長岡がえらい苦勞していた。やっと雪の上に出て快調に歩いていたが、調子に乗ってずっとトラバースしていたら稜線に登り返すところがすごい藪で、暑いのに加えて消耗する。稜線に出るとすぐにVI峰だった。後からきた単独のおじさんが稜線からきて追いつかれる。VI峰の下りは左のほうに踏み跡があった。小次郎のコルには雪があるが周りほうとうとしている。小次郎のコルからの登りは、がらがらのルンゼ状になりぼろぼろで落石を注意して間隔を空けて上る。当然雪はない。傾斜が緩くなり硫黄岳に着くが何の感動もない。硫黄岳からの下りはハイマツの藪になっているので切れ目はないかと右のほうに雪面をたどって下りていったがあるはずもなく、上り返して猛烈な藪を漕いで硫黄台地に。藪の中で長岡スパッツを落とす。全員暑くて、喉が渇き、残り少なくなったポリタンの水に雪を足して振るという、情けない状態になっていた。雷鳥ルンゼの下りは上部はブッシュを掴みながら下り、途中から石を落とさないように間隔を空け、見えそうなフィックスを掴んで左の尾根へ。単独のおじさんが長岡のスパッツを持ってきてくれた。稜線に戻り、コルへの下りで3m アプザイレン。その後、岩稜の右側へ上がるところがやっば

り悪く、先頭の蛭田がロープを垂らしてゴボウで上る。南稜手前のコルにテントを張る。隣におじさんもテントを張っていて、後でこっちのテントに飲みに来た。自称 6000m 峰ハンター佐久芳山の池田さんは、酔っ払って一人で船を漕ぎながら同じことを繰り返していたので、長岡が露骨に態度が悪かった。

#### 5/1 (晴れのち曇り)

3:30 起床 5:20~8:00 IV・V 峰間のコル~10:00 中山沢のコル 10:20~11:25 赤岳~12:40 III 峰下のコル~1:30 白樺台地 1:40~2:45 首領線上 2:55~4:30 千丈沢乗越  
赤岳前衛峰群も前半はガラガラ。III 峰の上りで宗像トップで取り付き、30m フィックス。上り着いても藪なので全くうんざり。結局この山行中、懸垂以外でロープを出したのはこれだけだった。IV 峰の下りで 45m アプザイレン。さらに VI 峰の下りで 20m アプザイレン。VII、VIII は池田さんに付いて行って右側をトラバースするが、ガラガラのトラバースの後、悪いルンゼを上り、コルに出る。コルからの下りで、先頭の小林はロープを持ったまま池田さんに付いて中山沢のコルへと下ってしまっていたが、下りはむちゃくちゃ悪く、懸垂なしで下るのは緊張する。前に通ったものが足場を崩して最後に下りてきた蛭田はえらい不機嫌になっていた。ようやく稜線上にも雪が出てきて幾つか岩峰を越えて白樺台地へ。時間的にまだ余裕があるのでここで泊る池田さんを後にして、先を急ぐ。雪稜状になり、視界も悪くなってきたころ主稜線上に出る。結局、硫黄尾根ではアイゼンを使わなかった。しばらく夏道をたどり、雪も出てきて歩きやすくなり、千丈沢乗越の千丈沢側にテントを張る。反対側は風が吹き荒れていたがこちらは静かだ。

#### 5/2 (雨)

強風のため沈殿。朝方、池田さんが通り過ぎていった。

#### 5/3 (曇りのち晴れ)

12:45 発~2:25 肩の小屋~2:35 槍の穂先~2:45 肩の小屋 3:05~4:00 中岳手前  
4:10~5:20 南岳小屋

午前中天气が悪いので、回復を待つて出発。西鎌尾根は左側を歩いた後、夏道通しに肩へ。槍の穂先は完全に夏道が出ている。北鎌を上って来るものあり。ようやく視界も開けてきたので南岳小屋を目指して出発する。中岳の下りで道を間違えかけたが、視界も開け、その後は雪稜状になり、南岳小屋へ。他に 1 パーティー小屋に泊っていた。

#### 5/4 (晴れ)

3:30 起床 5:35 発~6:30 最低コル 6:40~8:55 北穂山頂 9:10~11:45 白出乗越 12:05~12:55 奥穂山頂 1:10~2:10 ロバの耳・ジャンダルム間のコル~4:00 天狗のコル

長岡の出発準備は相変わらず遅い。今日はアイゼンを着けて出発するが、すぐに雪がなくなり外してしまう。大キレッドも飛驒泣きも夏と同じで問題ない。北穂まで来るともう人だらけだった。涸沢岳に行く途中、長岡の足が変な風に曲がり、みんな動揺したが、アイゼンを着けたまま靴が脱げたらしい。アイゼンを着けたり外したりしながら穂高岳山荘もう、人だらけ。夏以上に多いのではないだろうか。しかも、歩行が危なっかしく見えてい

てはらはらする。奥穂への上りの行列を見ていると、石を落とす人がいる。毎年事故も起こるわけだ。奥穂への上りで学習院に会う。渋滞待ちでいらいらする中、頂上につき、頂上からロープを出しているパーティーを尻目に先を急ぐ。この先も雪は稜線上に所々あるだけで、問題なく天狗のコルに着く。単独の人がテントを張っていた。後で聞くと、名古屋工大の山口さんだったらしい。金髪ピアスの長岡を見て、いたく感動していたらしい。

5/5 (晴れ)

3:30 起床 5:20 発～6:50 間の岳～8:15 西穂 8:30～9:40 岳沢～11:15 上高地バスターミナル

稜線上に雪もあるが、鎖もあるので問題なく西穂へ。少し下って西穂高沢を下る。みんなグリゼードはうまくはなかったが、滑っても重いのでシリセードになってしまう。雪渓上には石がごろごろしている。やはり今年は雪が少なかったようだ。藪を漕いで左岸の夏道へ。途中で宗像バイル落とす。上高地温泉ホテルで一週間の汗を流した。

文責：宗像

## 2. 新歓山行 (徳本峠)

参加メンバー：西井・椎谷(新人)、古瀬(以下OB)・古田・井上・前神

5/1

島島～岩魚止め小屋～徳本峠

現役は井上さんの車で島々入り。天気予報では雨だったが時たま陽も見える程度の曇り空である。途中なぜか遭難話に花が咲く。岩魚止め小屋に猿の首が落ちていた。先輩がたに持って帰って部の宝にしろと言われるが断る。力水を過ぎた辺りから残雪があり、最後の登りは雪の上を歩くことになる。徳本峠に到着した途端に土砂降りの雨が降り始め急いでテントを張る。穂高の稜線は上の方だけわずかに見えた。夕飯も食わずに酒盛りを始める。全員が酒を持ってきており、また酒の種類が皆違うのにちょっと感動する。初めてからすみを食べてまたちょっと感動する。夜半から強風になり、フライの重しが飛ばされる。

5/2

徳本峠～明神～上高地

朝から雨が降っており、勧誘のための山行に天気の悪い日を選んでしまったことを後悔する。徳本峠からの下り始めには登山道にはずぶずぶではあるが雪が残っていた。雪の上を歩くのは慣れていないである椎谷さんにピッケルを持たせ皆で周りを囲むように下りる。雨が冷たく休憩を取っても体が休まらないので休憩を取らず上高地まで下りる。島島まで下りると雨は降っていなかった。

## 3. 雪上訓練 <北アルプス涸沢>

参加メンバー：

5/30 (晴れ)

6：30 上高地発～7：20 明神～8：30 徳沢～9：40 横尾～11：00 本谷橋（以後記録不明）

「行動が遅い！」と怒られながら上高地へ。急行アルプスではよく眠れず、疲れが残る。だらだらとした平地を歩く。普通の靴がいいやと、つくづく思う。

涸沢の小屋が見えるあたりからたつぷりと雪が見え始め、ピッケルを出して歩く。6月に雪が見えるなど、初心者の私には、新鮮な経験。特に何の問題もなく、涸沢でテントを張った。

5/31（晴れ）

宗像さんがOBからいただいた酒を瓶ごと割ってしまったと知り、ガクゼン！

いやいや、それは後の話。ピッケルストップと雪上での歩き方を学ぶべく斜面を探す。宗像さんは、僕ら一年が予想していたよりも急斜面で練習するよう指示。おそるおそる始める。まあ一通りやれたかなと思うころにはすでに下る。

めしを食う。何もかも初めて参加した僕には新鮮で、戸惑いの連続。酒を飲もうとし、前述のことが発覚！しかたなく、山小屋で酒を買う。N氏はさっさと寝てしまう。さびしいなー。

信州大学のスキー山岳部の方が楽しく歌を歌うのが聞こえた。

6/1（晴れ）

今日は訓練後、さっさと帰るのかと思いきや、奥穂高まで登ってしまった。

穂高岳山荘から涸沢までまっすぐ登り、下るが、この斜面に僕はびっくりの連続。山頂に着くときも晴れで、すばらしい景色に息つく間もわずかに下山。テントの回収に手間取り、またまた怒られながら荷物をまとめる。最終バスに僕らのペースでは間に合わないことが判明し、明日にゼミを抱えに西井さんはあせって先を急ぐ。一年一同、ペースは遅い。休むのかなと期待を込めているところには西井さんはおらず、先へ急ぐにつれ、疲れが溜まる。足は遅くなる。

休んだ方がましだろう！と怒りつつ足を動かす。久田は疲れを通り越し、もう、グロッキー。宗像さんに励まされ2人は何とか上高地に。タクシーの運ちゃんのうまい話にのせられ、

他の人も乗せて松本へ！なんで観光地の運ちゃんは商売がうまいんだろうという疑問をよそに、なんとかあずさに乗れたのでした。

文責：久田

#### 4. 文部省登山研修所山岳遭難救助技術研修会 《立山雑穀谷》

参加者：宗像

6/11

富山駅で関西学院の長岡と一緒に、立山へ。僕の班は長岡と一昨年の夏山研修会で一緒になった南山の藤井と新潟大学の安藤さんだった。学生では一班だったが、参加者は

ほとんど消防士や山岳警備隊、自衛隊の人だった。社会人山岳会も若干いた。初日は言うまでもなく確保理論を聞いて、雨が降ってきたので体育館で確保技術の確認をする。僕らの班の講師は草島先生だった。職業別に（学生は職業ではないが）班が分かれているので、班によってやるのが専門的で違うようだ。夜はフリークライミングをする。安藤さんは岩石の研究をしているらしく、研修所の前にある石は 30 万円はすると教えてくれた。もちろん研修所の講師は気づいていないだろう。

6/12

研修所の前にある人工岩場で懸垂下降の仮固定、フィックスロープの通過、タイヤ落とし、ユマーリング、吊り下げ救助の練習をする。場所が狭いので時間がかかり、吊り下げ救助は十分にできなかった。夜は今日も人工壁。

6/13

雑穀谷にバスで移動し、背負搬送の練習をした。午後は実際に岩場で宙づりになったという想定のもと、学生と社会人の人だけで救助訓練をした。僕は被救助者になり、ずっと背負われているだけだったが、一番上から下まで降ろされる過程で一連の救助の流れがよく分かったと思う。夜は救助器具の説明を受けたが、言葉が聞き取りにくくて、ほとんど分からなかった。ただ、土嚢袋は確保支点として使えそうだった。そのあとフリークライミング。

6/14

雑穀谷でワイヤーを使っただけの救助訓練をした。実地で僕らが使うことは少ないとは思っていたが、カラビナー一個でぶら下がるのはなかなかスリルがある。

食堂ではワールドカップのアルゼンチン戦に夢中のようなのだが、無視してフリー。しばらくしたら山本一夫さんがきて、5・9 のルートを登りだした。すべてのヌンチャクに逆クリップし、最後はZクリップをして降りてきた。酔っているらしい。確保理論とフリーはあまり関係ないらしい。

6/15

最終日、雑穀谷で吊り上げ救助の練習をして、そのあと柴ゾリを作って引っ張った。水陸両用のソリはどんなところでも進めるが、作るのは難しそうだった。

日頃、救助技術を身につける機会がないので、いい勉強になった。事故を起こさないように気をつけたい。

## 5. 日本山岳会学生部小川山集会

参加メンバー：宗像その他多数

6/19

一年前学生部に初めて来たときに、いきなり小川山集会の担当にさせられてしまったのだが、今年は主催者になってしまった。関東以外の大学にも声をかけてみたのだが、30 人程集まり、講師に法政OBのロマンさんに来ていただき、まずまずの盛況だった。ガマス

ラブでしばらく登ったあと、全員でリバーサイドに移動し、コンペになった。一年生はブラックシープで、上級生はジョコンダで行ったが、だいたいみんな同じところで落ち、大学山岳部のレベルの低下を実感。僕も同じところで落ちたのだが。だいたい 5・11 を登ってやるといって長いのだが、漫然と登っているだけではいっこうにうまくならない。そのあと 5・11 のルートにトライしてみたがやっぱりだめだった。夜は豚汁をみんなで作ったが、量が多すぎて余ってしまった。みんないなくなった後、宇都宮大の中島と、南山大の藤井と僕とで部員一人の者同士が集まり、しみりと語り明かすのだった。

6/20

上智の太田と妹岩でクラックに登ったり、マラ岩でトップ・セカンドに登ったりと全くのマッタリモード。裏側の 5・14 のループに登っている人がいた。その後、慶応の榎並も加えて弟岩に登りに行ったが、着いた所で雨。何ともさえないクライミングツアーだった。

文責：宗像

## 6. 個人山行 《奥多摩マナイ沢》

参加メンバー：宗像・松田・蔦谷・古瀬OB

6/28 (記録不明)

全体的に難所はなかったが、1、2度迂回した。そのためロープを使うことはなかった。沢から登山道までは傾斜があり、地面も軟らかく歩き難かった。登山道から駅に戻る。

文責：蔦谷

## 7. 三ツ峠岩登り

参加メンバー：宗像・蔦谷

7/10~11 (一日目：晴れ、二日目：曇り)

早朝、駅を出発し、ゲレンデを目指す。気温も高く蔦谷は疲れ気味であった。コースは所々崩れていたが全体的に整備されていた。一日目、二日目と岩登りをする。蔦谷は 2 回目の岩登りで各ピッチごとに時間がかかった。

文責：蔦谷

## 8. 個人山行 《谷川岳》

参加メンバー：宗像・蔦谷・佐藤

7/18 (晴れ)

12:05 土合駅発~12:30 休憩舎~15:40 ラクダのコブ手前~18:25 肩の小屋~頂上往復  
横浜の自宅から向かうこととしたため宗像さん・蔦谷と 8:35 には大宮駅で合流することにしたが、大宮で会うことが出来ず焦る。結構不安だったが、高崎駅で無事合流できた。土合駅の長い階段を上り、途中の休憩舎で水を入れる。登山道に入ってから、眺めもよく、風通しもよかったので快適だったようだが、もう覚えていない。肩の小屋で荷物を下ろして頂上を往復する。

7/19 (晴れ)

4:10 起床～5:20 出発～6:15 オジカ沢の頭～9:00 万太郎山～10:15 毛渡乗越付近～  
12:00 エビス大黒の頭付近～13:30 仙ノ倉山～14:20 平標～15:45 平標登山口～16:  
40 越後湯沢駅

後から晴れたが、朝は霧が出ていた。道脇の笹の結露によって、膝から下が水浸しになる。以降仙ノ倉山迄は宗像さんがメロンを出してきたこと以外ほとんど記憶がないのママ。どうすればいいのママ。知るか。平標ではマダム達一団のパワーに感想するも、その後の下り道で青空と一面の花畑が作りだしていた絶景の前にマダム達も色褪せるのだった。

文責：佐藤

### 《 フリートーク 》

宗像 充

ブータンからかえってしばらくの間、ブータンの経験についてゆっくり考えられたものと思う、自分にとって登頂すること自体は一つの課題であったから、それがなされなかったということは、アタックから帰ってきたときから度々振り返ることであった。ただ、しばらく時間が経ち、2、3の山に登り、振り返ってみたときに、それほど問題にするべきことではないのかもしれないと思った。もちろん、自分の力不足ということをおいて、いいわけをするわけでもない。ただ、短い期間であったとしても海外での登山を計画し実行するということはこれまでできないような経験を僕に与えてくれたものであったし、たとえ登れなかったとしてもその経験はそれを補って余りあるものであったと思っている。何よりおもしろかったと思う。その中で、今までやったことのないことをすることは、単純におもしろかったし、またより難しいもの、未知のものに挑むことがおもしろいものであるということを再認識させてくれたと思う。というわけでまだまだ山には登り足りないと思う。暇のあるときに、登れそうなところだけを選んで登るというのではなく、自分にはこういうこともできるんだ、ということを実感できるような山に登りたいと思う。もちろんその中で失敗は繰り返すだろうが。

この正月、成蹊大学遭難の報を聞き、じっとしていることができず、迷惑になるかも知れない、とは分かっているも駆けつけずにはいられなかった。だが、そこでの現実を知り合いの死に対して何もすることができない自分を実感するだけだった。いまだ行方不明の榊原とは同じ国立にすむということもあり、度々市ヶ谷からの帰りなど、話す機会があった。それだけでも、第一報を聞いたときから心配でならなかったが、徐々に事故の詳細が分かってくるにつれ、少ない上級生で複数の一年生を率いて山に向かい、そして悪条件が重なっていく、という実態は、うちの部でも十分起こりうることであり、とてもひとごととして片付けられはしない。まだ、榊原が見つかっていない段階で、また、当事者の見解がでていない段階で、事故に対する評価を云々するともりはないが、残念でならない。ただ、だからと言って山そのものが登る値しないものである、というような極論に達しない。山は山として存在するだけであり、そこで起こるであろう自然現象や、不意と言われるようなことも山ののままの姿に過ぎない。その中でどういうふうに行動し、取り組んだ



かは言い得るにしても、山自体に対して感情のままに云々するのはおこがましいような気がするのだ。このようなことは、関係者にとっては無意味かもしれないことであり、失礼にあたるかもしれない。ただ、事故を契機に自分の山登りについて、すこし考えてみざるを得なかった。

もし、自分にできることがあれば少しでも力になりたいと思っている。とりわけ行方不明のままの榊原が早くみつかってほしいと思っている。彼が「成蹊の黄金時代にするんですよ」と言っていたのを思い出すにつけても本当に残念だと思う。

## 9. 夏合宿 《剣沢定着・祖母谷ー白馬岳ー親不知》

参加メンバー：外地OB・井上OB・宗像・松田・蔦谷・佐藤

8/2 (雨)

7:55 室堂出発～8:40 ロッジ立山連峰～12:35 剣御前小屋～13:35 剣沢

出だしから天気が悪く、憂鬱になる。寒いし。

ただでさえ重たいところに着替用のズボンだのシューズだのを勝手に詰め込んでいたS藤は、腕力の貧弱もたたって降ろしたザックを背負うことができないという無用の困難を抱えることになるが、持ち前のやる気の無さでカバー。一方T谷は思うように足が進まず難儀する。悪天のせいもあってか剣御前までの登りはハードだった記憶が。

8/3 (豪雨)

悪天候のため沈殿。テント浸水。

他では雪上訓練に行ったパーティーもいたらしい。

8/4 (曇り/雨)

5:35 剣沢出発～6:25 平蔵谷出合～平蔵谷・武蔵谷出合で雪上訓練～15:30 武蔵谷出合  
出発～17:10 剣沢 (宗像・蔦谷 18:00)

相変わらず天気は悪いが、雪上訓練に出発する。雪渓を降りている最中にドーンという音がしたので、急いで登山道に上ると、今までいたところの30～50m先で丸く雪渓が陥没した。びっくり。雪渓の状態が悪いらしく宗像さん達は場所をどこにするか迷っていたようだったが、平蔵谷・武蔵谷出合で雪上歩行・ザイル・ピッケルストップの練習をすることになった。

帰り道で16:00をまわってしまったので、宗像さんと蔦谷は天気図をとるため別行動となる。

8/5 (曇り/雨/時々晴れ)

7:00 剣沢出発～10:25 前剣～11:45 剣山頂～12:30 山頂発～14:30 平蔵谷偵察 (井上OB・宗像) ～15:00 平蔵谷取り付き～18:30 平蔵谷出合～20:45 剣沢

この日で外地さんが下山される。剣山荘・一服剣を経て前剣へ。一般縦走路を通っていたので中高年の方も多かったのだが、宗像さんは何だかその手の人が余り好きでないら

しくブツブツ言っていたような気がする。

剣の山頂からは一旦北方稜線に出て長次郎谷から下ろうと試みるが、状態が悪かったため中断。引き返して平蔵谷の取り付きから平蔵谷を下る。平蔵谷の出合に出たところで 18:30 を過ぎていたのでヘッドランプを出そうということになったが、佐藤はヘッドランプをサブザックの底の方に詰め込んでいたのを持って来なかったと勘違いし、井上さんに苦し紛れの言い訳を展開して呆れられる。しかし持ち前のやる気の無さでカバー。一方蔦谷は思うように足が進まず難儀する。剣沢に着いた時には 21 時に近かった。

8/6 (晴れ)

7:50 剣沢発～13:10 着 (宗像・松田)

ようやくの好天。翌日からの縦走のため、井上さん・宗像さん・松田さんは使わない定着用装備を持って(東京に送るため)室堂へ向かう。井上さんはそのまま下山される。その間、蔦谷・佐藤は全員シュラフ・服などを干していた。安息日。

8/7 (雨/曇り・晴れ)

5:30 剣沢発～7:20 真砂沢～8:50 近藤岩付近～12:00 仙人山の分岐～14:10 仙人湯小屋～17:40 阿曾原小屋

縦走に出発。真砂沢を経て仙人山へと向かうが、この時にはまた天候が悪く、登っている急斜面を雨水が滝のように流れていた。登り切るあたりにはまた晴れ間が出てきていたのだが、そこの道脇に物件があった。今まで自分たちはこの物件を経由してきた雨水にずっと浸かっていたのか、と思うとやりきれなくなったが、忘れることにする。しかし、今思うとあんな所に(片側が結構切り立った急斜面で、道幅も狭い)でどうやって物件を捻出することができたのだろうか、と不思議である。

仙人池ヒュッテを通過して下り道へ。2 時間あまり歩いて仙人温泉に着くが、そこで既に体力的にあまり余裕の無かった蔦谷と、そこにあった「阿曾原」の文字を見て目的地は近いと勝手に勘違いした佐藤にとって、さらにそこから 3 時間あまりの行程はブルーだった。最終的に目的地に着く頃には、蔦谷はキレかかっており、佐藤は投げやりになっていた。松田さんも結構疲れていたように見えた。

8/8 (晴れ)

5:40 阿曾原発～12:00 樺平～13:00 祖母谷温泉

阿曾原温泉を出て、樺平まで延々と続く水平歩道を行く。祖母谷温泉へ向かうところではがけ崩れが起きていて通行止めとなっていたが、温泉の方が車で迎えに来てくれたので無事目的地に着くことができた。(この日予定では不帰岳小屋まで行くことになっていたが、カットされた。)

8/9 (晴れ)

6:00 祖母谷発～6:30 白馬登山口～11:15 1681 手前～12:15 1823 手前～13:15 1888～14:30 不帰岳小屋

出発直後蔦谷が体の不調を訴えたため、登山口から少し入ったところで 30 分程度の休憩

を取って回復待ちをする。その後は特に問題なく進むが清水尾根は長ったらしくて嫌だった。小屋でお茶を作っていると阿曾原から一緒に先に行っていた中央大学のワンダーフォーゲル部の人たちが引き返してきた。メンバーの一人が日射病になってしまったということ。

8/10 (晴れ)

4:30 不帰岳小屋発～11:30 白馬岳山頂～15:50 燕平

小屋を出てから清水岳までの道は高山植物の原になっていて良い景色。白馬の頂上でガスがかかっていたらブルーだな、と心配していたのだが割と晴れていたのが良かった。雪倉の小屋のところでは、蔦谷は宗像さんが休憩を取るものと当て込んでいたらしく「もう少し行こう」の声に何ともいえない顔をしていた。

8/11 (曇り)

5:20 燕平～7:30 朝日岳～?～15:20 犬ヶ岳梅海山荘

天気はあまり良くない。朝日岳を過ぎてからの道はちょっと尾瀬を思わせるような湿地帯を通っていて景色はいいのだが、長い。登ったり下ったりを繰り返しながら進む。梅海山荘の周囲に水場が無いので犬ヶ岳手前の沢（ここが水場とされている。結構下りる）で水と入れる。その後の急登ではT谷がキレて、「クソッ」「まだかよっ」等の悪態を撒き散らしながら登っていた。

8/12 (雨/曇り/晴れ)

5:00 過ぎ位～7:10 菊石山～9:40 白鳥山山頂～13:00 尻高山～15:00 親不知

明け方はもしかすると停滞?と思わせるほどのものすごい雨だったが、起きる頃には落ち着いていた。菊石山手前のところで水を入れて、かなり長かった記憶のある白鳥山の登りを終える。そこから坂田峠までは急勾配の下りで、残りはぬかるんだ道がだらだらと続いていた。佐藤は最終日で気が緩んでいたのかやる気の無さが災いしたのかよく分からないがぬかるみに何度も足を滑らせて泥塗れになってみたり、蔦谷は思うように足が進まず難儀する。

文責：佐藤

### 《 フリートーク 》

久田 英一郎

正月草々。僕は非常に眠たいです。実家に帰ると、おいしく、たくさんのおかずが自動的に出て来てしまう。そのことにひたすら感激し、シアワセを感じつついただいたのでした。その極楽生活からまだ抜け出られないのでしょうか。

元来、気持ちの切り替えが下手なほうです。山から下りてくると、1、2日虚脱状態になってしまうことがめずらしくありません。それで、移動はゆっくり時間をかけたほうが、その間に色々と自分の中をまとめることで、新たな状況に適合しやすくなるのです。

ほかに、まあ、今の生活に生き生きと入れられる場面が少ないことが関係しているかも知れ

ません。みなさん、自分のやりがい、やりたいことを求めてさまざまな活動をしていらっ  
しゃいます。その一つに山があるかもしれません。まだまだ他にもたくさんありそうです。  
自分に刺激を与えてくれ、おもしろいと感じることができ、なんだか少し自分に自信が持  
てる、やっていることそのものが好きと言える、そんなこと。

ないものねだりも僕は、ああいいなあと思っては、今の自分を振り返り、時にはやって  
やるぞと奮い立ち、ある時はもういいやと思ってしまったりして発奮、意気消沈の繰り返しでゴザル。

まったく違う分野に興味があるのだけれどもどこか共通点がある、似たようなことをや  
っているのだが違うところもある。そんな人達に囲まれ、また自分は自分のことをやれて  
いる環境は、とてもおもしろいでしょう。そういう具体的なものを探しつつ。“つなあり”  
を見つめ続けつつ。

午後の昼下がり。天気快晴。肌寒い中をのんびりと自転車をこいで、空を見上げながら、  
ゆっくりとめしが食えるよろこびをかみしめつつ・・・・・・・・。

## 10. その他の山行

4/19	湯河原幕岩	宗像・幻の一年生2人・古瀬OB・遠藤 (上智3)
5月のある週末	日和田	宗像・小田・井上OB 他早稲田の部員
5/20	富士山	宗像・遠藤 (上智3)
6月のある週末	奥多摩川乗谷 火打谷 (敗退)	西井・松田・小田
7/4	広沢寺	宗像・蔦谷・古瀬OB
8/21~24	北アルプス室堂 ～立山～剣 (バイト山行)	宗像
9/10	富士山	宗像・栗谷川 (法政4)・山梨 (東海4) 長岡 (関学4)・榎並 (慶応4)
9/11	広沢寺	宗像・蛭田 (早稲田4)・長岡 (関学4)
9/17	広沢寺	宗像・蛭田 (早稲田4)・栗田川 (法政4) 山梨 (東海4)・榎並 (慶応4)・長岡 (関学4)・小林 (駒沢4)
9/18	富士山	宗像・蛭田 (早稲田4)・栗谷川 (法政4) 榎並 (慶応4)・長岡 (関学4)・小林 (駒沢4)
9/19	三ツ峠	宗像・蛭田 (早稲田4)・栗谷川 (法政4) 榎並 (慶応4)・長岡 (関学4)

9/26

富士山

宗像

9月のある週末

奥秩父東沢釜ノ沢

西井・松田・大谷 OB

## 《 98年上半期を振り返って 》

山岳部の活動について幾つかトピックスがあるので報告したい。まず、何はともあれ新人が入ったことである。このこと自体は歓迎すべきことであるが、その過程で反省すべき点も多々ある。まず、山岳部の活動について無方針の下で勧誘活動を行った結果、山に興味がある人間を山岳部自体が吸収できないことが露呈した。要は、どんな人間でも入ってくればよいというような安易な発想で勧誘を行った結果、例年通り活動を進めようとする僕とそんなはずじゃないというような新人とのギャップができてしまい、入らないならまだしも、新人に振り回された結果、やめてしまうという例があった。上級生が少ない以上なりふりかまっていられないという事情があったにせよ、双方にとって無駄なことである。大部分は僕に責任があるのだが、何をやるかえたいの知れないものに新生生ははいてこないという、当たり前の教訓は得られる。また、真剣に勧誘をやらなければ入ってこないのである。少なくとも、残り少なくはあるが、一年生に対しては山を舞台に活動すること、またより困難なものを克服することのおもしろさ、そして、山の危険について教えていきたいと思っている。危険ではない山などという考えは認める気はない。とはいえ、以上のようなことが現在においても完全に克服されているわけではない。

次に、体育会に復帰したことである。一年間は移行期間だがいずれにせよ待遇は体育会と同じである。この判断は僕が主に行ったものだが、西井も含め、復帰時の決定は部員の総意があるものと思っている。このことについては部室の再建問題とからんで石先生との関係もありメール上でOBとも議論になったが、今まで放置されていた山岳部の安全確保の問題も議論になるなど、タブーに触れることで問題点がボロボロ出てくるという効果があっただけでもよかったと思っている。僕にとっても西井にとっても体育会に入るメリットと、このままサークルとして活動することのデメリットを比較して決定を行ったまでである。勧誘のやりやすさというのがキーワードであり、そのことについて石先生にも山内OBにもお叱りを受け、その場合責任問題という切り口から説明されるのだが、脱退したときにせよ、現在にせよその責任がだれの何に対するどういう責任であるかいまだにはっきりしない。大学に対する責任であるならば、教育活動の一環として課外活動を認めているのだから学生の組織である体育会を分けて考えること自体に無理があるし、親への責任であるならば、信頼を得るように部も個人も努力していくしかないと思う。また、引地OBから今いる部員がどうおもしろく山に登れるかを考えればよいといわれたが、部員が集まらなければおもしろいも何も、選択肢がないのである。「山岳部が体育会じゃあないのは死亡事故を起こしたからでしょ」と無神経にも言ってくれる新生生に一々説明するのは現役部員なのである。

さらに、部室再建が具体的に動き出した。現在の部室は何度も言うように限界に近い。ここまで使い続けてきた部員も立派だが、なるほど、実行に移すとなると問題も出てくる。ほとんどOBまかせで計画は進んでいったが、着工を待つばかりなので、作る段階で出来る限り手伝いたいと思う。

また、知っている人は限られていると思うが、楊さんg 中国に帰って行った。山内 OBのころ以来長らく日本に滞在していたそうだが、ドクターをとって中国の法律事務所で勤めるとのこと。帰る間際に部室に来て懐かしそうにしていた。

部の活動は主に一年生の指導が中心となった。入部するのが遅かったため、例年のようにしっかりとした予定の下に山に行けず、ばたばたしてしまい、一通りのことを経験して見るだけに終わったというのが正直な所で、体力、技術のジャンル毎に大きな開きができず、また、その一年生も経験不足は否めない。これからの活動で経験を積んで欲しい。